

## 児童・生徒の高齢者へのかかわり

——場面に対する自発反応を手がかりとして——

○岩崎恭枝\* 岡野雅子\*\* 齋藤美保子\*\*\* 小河原俊子\*\*\*\*

(\*茨城大, \*\*群馬女子短大, \*\*\*都立両国高・非, \*\*\*\*実践女子大・非)

**【目的】** わが国は急速に高齢社会に移行し、さまざまな世代がお互いに異世代を尊重して共に生きる社会を築くことが今日的課題となった。家庭科教育においても高齢者に対する理解を深める授業展開が要請されている。本研究は、児童・生徒の高齢者に対する理解の現状を把握し、授業研究のための基礎的資料を得ることを目的として、高齢者とのかかわり場面を描いたイラスト画を児童・生徒に提示し、それに対する自発的反應を手がかりとして探ることを試みた。その資料に基づき児童・生徒が高齢者をどのように捉え、どのようにかかわろうとしているかなどについて、発達段階による変化の視点から考察した。

**【方法】** 場面画A「自動販売機の前で困っている高齢者を見かけた場面」と、場面画B「ハイキングにでかける高齢者と出会った場面」を提示し、吹き出し部分に書かれた記述を資料とした。対象者は、埼玉県と茨城県の公立の小学4年生308名、中学1年生307名、高校1年生315名、高校3年生298名の計1,228名(男588名、女640名)で、調査時期は1999年6～7月である。

**【結果と考察】** 場面A:「自分がやってあげよう」はいずれの段階でも最多であり、小学生は7割を占めるが高校生は半減する。「どうしようかな」と行動をためらう反応が小学生は1割だが中・高生では2～3割を占めるようになる。場面B:「挨拶」と「元気だな」がそれぞれ3割が多いが、「挨拶」は中・高生でやや減少し女子がより大きく減少する。「元気だな」は、小学生は1割弱だが中・高生は3～4割と多く自分の持つ高齢者イメージを超えた姿に驚く様子が伺える。これらの結果から、発達段階が進むと直接的行動によるかかわりは減少し、自己の高齢者イメージや将来像と照合する視点が現れる傾向があり、また、場面画への自発反応は、自由な発想を引き出すことが可能で、授業の導入時の動機づけの一つとして有効であると思われる。